

増える「遺骨の宅配便」

高齢、経済事情…納骨の悩み解決

墓などに納骨するため、遺骨を宅配便で送る「送骨」に対応する寺や霊園が道内でも増え始めている。「遺骨をモノ扱いしている」との批判の声がある一方で、高齢や多忙、経済的な事情などで持参するのが難しい人にとっては「切実な問題が解決できる」と好評という。



送骨のために用意した段ボールを手にする北海道中央霊園の武田寛理事長

三笠市にある北海道中央霊園は2014年、送骨サービスを開始した。開設した1970年代に墓を購入した人たちが高齢になり、「伴侶を亡くしたが、納骨に行けない」という声が相次いだのがきっかけだ。

霊園側で段ボールを送り、骨つぼをガムテープや緩衝材で梱包して送り返してもらう。火葬されたことを証明する書類などは別に郵送してもらう。永代供養が付いた合同墓に納骨する

場合は3万9千円で、送骨の費用は無料としている。道内のほか、墓が高額で所
有しづらい関東などから、送骨を活用した合同墓などへの納骨は、14年の約20件から15年には約80件、16年は約90件まで増えたという。

武田寛理事長(55)は「予想を上回る需要があった。『けしからん』という苦情も覚悟していましたが、これまで一件もない」と話す。重い骨つぼを抱えて移動す

るのが大変なため、遺骨を送って後日、遺族が納骨に立ち会う場合もある。

送骨を巡っては、仏教界の一部からは「遺骨は胸に抱いて運ぶべきだ」と批判もあるが、3年前から受け付けている北海寺(札幌市中央区)の長谷川観樹住職

(43)も「確かにそれは理想の形だが、家族の形が変わり、地域の縁も薄れる中、現実に管理に困っている人がいる。供養は責任を持つてさせていただく」と説明

する。

送骨には、ヤマト運輸や佐川急便など大手宅配業者が遺骨の配送を受け付けていないため、制限していない日本郵便の「ゆうパック」が利用されている。